

第74回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2015年7月13日(月) 14時～17時

兼題「花火」

川井素山 ○築打つや岸に「う」の字の旗なびく
蚊遣火やルーペ頼りの糸通し
青枇杷や苑に古りたる戦士の碑
夜の浜宴に華そふ遠花火

保井寶正 ○紫陽花の朝一番の交響詩
冷奴いつもと違ふラツパの音
筆架ゆれたよりを書くや夜の秋
手花火や命短き小宇宙

青木英林 ○花火終り人無き浜に波の音
作句終へホツと一息水を打つ
縁日のラムネ懐かし幼き日
どぜう鍋フウフウ云ひて食しける

後藤克彦 ○先競う赤と黒との蟻の道
蝸牛虫好みの花を這う
父の日も飲屋賑やか時節かな
園児らは花火待つ間に船を漕ぐ

佐久間喬 ○ビルの谷音だけ聞こゆ揚花火
蛍舞ふ森の深さに草匂ふ
植木屋の鋏せわしく梅雨晴間
睡蓮の凜と咲きたる阿弥陀寺

永井正孝 ○梶子の匂ひで案内夕間暮
唇の震え弾ます海開き
鼠花火足元惑ひ声笑ふ
黄菅咲く高原に霧かご揺れる

- 丸山酔宵子 ○噴煙をもろともせずに雲の峰
雨上がり風が伝へる遠花火
冷し麦朱色取り合ふ昼下り
水切りで旨み深まる冷奴
- 菊地崇之 ○おじぎ草触れてたおやめぶりためす
妻の指す白さ目に染む夏生草
サングラス身かくす意図を見すかされ
自慢気にパト散る花火我が人生
- 牧野里山 ○鳥が追ふ獲物の先の夕焼かな
草花火丸く囲んで息潜め
朝顔市入谷の町は人の波
投釣や穏やかな海碧い空
- 佐久間たか子 ○朝挽ぎのきゅきゅつと泣いて茄子の紺
息潜め児らの手花火競い合ふ
空に伸ぶ大輪小輪の揚花火
白球追ふ黄色き声に日傘ゆれ
- 佐伯武雄 ○金魚すくい此の子も母に似て器用
痴話喧嘩冷えし西瓜を切るまでは
手花火が妻の色気を倍加する
夏の風邪薬が効かず医者うらむ
- 大山竜海 ○揚げ花火老いを蹴散らす浜の宵
波音に花火重なり浜賑わふ
島海鳥居重なり神遊ぶ
紫陽花を植え替えおりて老い楽し
- 吉田啓悟 ○隙間なく十葉の咲く暗さかな
梅雨晴間一気呵成に洗濯機
卵の花のこぼれかたまる排水口
かたつむり歩いた跡や遠花火
- 佐々木彩女 ○儂さのいつそ際立つ大花火
空の色三度変りし大花火
鷺草の翔ぶ影ひとつ窓静か
薄化粧運命さだめに生きる人涼し

山本草風 ○父の日や馳走の前に説教かな
籠枕類に寝じわの熟睡うまいかな
機械音久しく聞かぬ田植歌
大盃に花火浮かべて夢こち

金森純女 ○夏の峯一足ごとに空見上ぐ
黒南風や首筋つたふ汗やまず
下腹にどどんとしみる花火かな
さくらんぼ囁む出すやまずひとパック

中山志津久 ○山裾の谷渡りの木花火咲く
亀千鳥水辺に漂うとび石かな
銚流あらひ夏告げ水や祇園祭
父偲ぶ鮎の焼き干し侘の味

次回 「萩句会」

日時 2015年8月10日（月）14時～17時
兼題『蚊遣り』『蚊遣り香』『蚊取り線香』一句
当季雑詠三句 計四句